

# 東洋學報

第九十八卷第三号 平成二十八年十二月

## 論説

### 後漢安帝期における宮廷勢力の変容

——宦官擡頭をめぐって——

平松 明日香

#### はじめに

延光四年（一二五）十一月丁巳の夜、十九人の宦官を主導とするクーデタが発生し、十一歳の済陰王、順帝が即位した。延光三年（一二四）に皇太子の座を追われた済陰王が宦官の手により皇帝位に即いたのである。この功績により、クーデタの中心人物である宦官孫程ら十九人は列侯に封ぜられ、順帝擁立こそが宦官専横の決定的な契機になったとされる〔東一九九五・二二二頁〕<sup>1</sup>。間違いなくこの事件が後の宦官擡頭に大きな影響を与えたのだが、それに先立つ安帝親政期（一二一～一二五）から宦官は政治的に活発な活動を始めていた。後漢時代における宦官の政治参与は、永元四年（九二）の和帝による政權奪還に協力した鄭衆に端を発するが、宦官集団の最初の発展期とし

ては元興元年（一〇五）から永寧二年（二二）の鄧太后による臨朝称制期であると考えられている〔勞幹 一九四八〕「富田二〇〇一」〔渡邊義浩 一九九五・三三七～三六五頁〕。確かに、文書伝達の必要性から宦官が鄧太后の周囲に存在しており、中常侍が顧問応対という皇帝からの諮問に応える機能を有していた以上、宦官が側近としての地位を固めていった可能性は否定できない。しかし、実際に宦官と外戚の提携が顕著になったのは、鄧太后の臨朝称制後、安帝親政期からである。安帝親政期およびそれに続く閹太后臨朝称制期は合計五年と短いためか、これまでほとんど考察の対象にされてこなかった。しかし、宦官による選挙請託や、宦官と外戚の密接なつながりはこの時期から始まっている以上、軽視すべきではない。本稿は、宦官が安帝親政期に政治的進出を果たした要因を、安帝親政期の外戚であった耿氏、閹氏と鄧氏派官僚、反鄧氏派官僚との関係から考察する。先行研究でほとんど注目されていなかった安帝親政期および閹太后臨朝称制期を検討することによって、後漢政治史の転換点を当該期に求めることが本稿の意義である。周知のとおり宦官の擡頭と後漢王朝の滅亡とは密接にかかわっている。その擡頭過程を描くことは、以降の宦官勢力拡大の要因を知る上でも有益である。また、以上の検討により、皇太后臨朝称制のみを宦官擡頭の主要因とみなしがちな先行研究の問題点を克服することができよう。

## 第一章 安帝親政期の外戚、耿氏と閹氏

安帝が親政を開始すると、今まで政權を担っていた外戚鄧氏が誅滅され、新たに二つの外戚が並立した。耿氏と閹氏である。安帝はもともと清河王家出身であり、後漢で初めて外藩から帝位に即いた皇帝であった。耿氏は清河

王家時代の安帝の嫡母の一族であり、安帝親政以後、中央に進出した<sup>(2)</sup>。では、耿氏はもともとどのような一族であったのか。

安帝親政期に擡頭した耿氏は扶風茂陵の出身であり、後漢建国の功臣耿弇を祖に持つ一族であった<sup>(3)</sup>。東晋次氏によれば、後漢において特定の七家是一般の功臣とは異なる待遇を受け、官職授与・公主降嫁の榮譽が与えられ、またその家の娘を皇后に立てるなど、皇室との結びつきを深める政策がとられた「東一九九五・四八、五七～五九頁」。耿氏は七家の一員であり、皇后こそ出していないが、清河王家の事例にもあるように諸侯王家との通婚は行っていた。また、清河王妃耿氏の母は明帝の娘の隆慮公主であり、耿氏に対する公主降嫁も行われていたことがわかる。このように、耿氏は非常に高い家格を持つ一族であった。その一方で耿氏は辺境官僚としての活躍が目立つものの、安帝期、順帝期の例外を除いて、中央官僚を出した記録は稀である<sup>(5)</sup>。以下に安帝親政期に至るまでの耿氏を具体的に述べる。

まず、安帝親政期に中央に進出した耿氏の筆頭として耿宝が挙げられる。耿宝は清河王妃耿氏の兄であり、延光三年（一二四）秋八月に大鴻臚から大將軍に遷った<sup>(6)</sup>。安帝の崩御と共に耿氏は誅滅されたため、耿宝の大將軍就任期間は一年に満たないが、政治の中枢を担う官に就任していた点は特筆すべきである<sup>(7)</sup>。また、耿宝の弟の子である耿承が安帝期に侍中に就任していたが、これ以外の耿氏は管見の限りみあたらない<sup>(8)</sup>。

次に、安帝皇后の一族である閭氏に関して確認する。閭氏は河南滎陽の豪族であり、皇后の祖父、閭章は永平中（五八～七五）に尚書、次いで歩兵校尉に就いた。加えて、閭章の妹二人は明帝の後宮に入り、貴人となった。閭皇

后冊立に至るまでに史書で確認できる閭氏は、以上の三人である。つまり、閭氏は明帝期に中央官を出してはいるが閭皇后冊立より前に九卿以上にのぼった人間は管見の限りみあたらない。その上、閭氏は建国の功臣一族でもない。閭氏の立后は、皇后を出す家がゆるやかに固定されつつあった後漢の風潮に合わない珍しい例であった。おそらく、閭皇后の叔母が、鄧太后の兄である鄧弘に嫁いでいたという姻戚関係故に立后されたのであろう。安帝親政期の閭氏は以下のとおりである。

閭氏の領袖としては閭皇后の兄である閭顕が挙げられる。閭顕はおそらく耿宝と入れ替わりになる形で大鴻臚に就任し、延光四年（一二五）の安帝崩御後に車騎將軍に就任し、將軍として大いに朝政に関わった。この他、閭顕の兄弟である閭景、閭耀、閭晏は、それぞれ安帝親政期には「卿校」、すなわち九卿または五校尉のいずれかの官に就いていた。<sup>(10)</sup> 加えて閭顕、閭景の諸子は安帝親政期に既に、年少ながらも黃門侍郎に任ぜられていた。<sup>(11)</sup>

記録に残っている限り、同門の就任者という点では閭氏一族の方が耿氏一族よりも多いが、家格という点では、耿氏は閭氏より格段に高く、さらに短期間ではあるが耿宝は大將軍という高位に就いていた。しかし安帝親政期において両氏が反目した形跡はなく、むしろ太尉楊震の謀殺や皇太子劉保廢位などで提携していた（『後漢書』列伝六八宦者孫程列伝）。また、安帝親政期に中央に進出した外戚の範圍はいずれもその家の領袖およびその兄弟、子弟くらいまでである。鄧太后臨朝称制期の鄧氏は、鄧太后の従兄弟に至るまで任官されたことに比べると、安帝親政期の耿氏、閭氏の任官は限定的であったといえる。

では、耿氏、閭氏は宦官らといかに提携したのか、また宦官擡頭の時期はいつだったのかを次章で検討する。

## 第二章 安帝期を中心とする宦官、乳母の擡頭

### 第一節 鄧太后臨朝称制期における宦官

後漢における宦官の擡頭時期を表す史料としては以下の二例がよく挙げられる。

〔朱穆〕乃ち上疏して曰わく「案するに漢の故事、中常侍は士人を參選す。建武以後、乃ち悉く宦者を用う。……」と。帝納れず。後に穆進見するに因りて、口ずから復た陳べて曰わく「臣聞くならく漢家の舊典、侍中・中常侍各おの一人を置き、尙書の事を省<sup>み</sup>しめ、黃門侍郎一人、書奏を傳發し、皆な姓族を用うと。和熹太后女主を以て稱制するより、公卿に接せず、乃ち閹人を以て常侍・小黃門と爲し、命を兩宮に通ぜしむ。此れより以來、權は人主を傾け、天下を窮困せしむ。宜しく皆な罷遣し、博く耆儒宿德を選び、政事に與參せしむべし」と。<sup>(12)</sup>

〔後漢書〕列伝三三朱穆列伝

明帝より以後、延平に迄るまで、委用漸く大にして、其の員稍く増し、中常侍は十人有るに至り、小黃門は二十人、改むるに金瑤右貂を以てし、卿署の職を兼領せしむ。鄧后女主を以て政に臨み、而して萬機は殷遠なるも、朝臣の國議、帷幄を參斷するに由無く、制を稱し令を下すは、房闈の間より出でず、刑人を委用し、之に國命を寄せざるを得ず。手は王爵を握り、口は天憲を含み、復た掖廷永巷の職、閭闔房闈の任には非ざるなり。<sup>(13)</sup>

〔後漢書〕列伝六八宦者列伝序

このうち主に朱穆列伝の「漢の故事」に基いた上奏文により、宦官の擡頭時期は鄧太后の臨朝称制期と考えられて

きた「勞幹 一九四八」「富田 二〇〇一」「渡邊義浩 一九九五・三二七・三六五頁」。桓帝期の朱穆は尚書、乃ち基本的に非公開であつた国家檔案、故事を扱う機会が多い官に就いており、<sup>(14)</sup>その立場に鑑みても「故事」の内容が漢代の現実を反映していた可能性は高い。永元四年（九二）のクーデタ以降、侍中の禁中宿直が禁止され、禁中に宿衛するのは宦官専任の中常侍のみとなつた「渡邊將智 二〇一四・二六一・二六二頁」。加えて、皇太后の居住空間である長樂宮に出入し、文書の授受を行つたのは、宦官専任の小黃門であると指摘される「渡邊將智 二〇一四・二二三頁」。鄧太后の身近に控え、文書伝達に携わつていた宦官が鄧太后の意思決定に影響を及ぼした可能性は考えうる。また、後述のように和帝期から、宦官である鄭衆や蔡倫が重用され始め、鄧太后も引き続き彼らを身邊に置き続けた。朱穆は、鄧太后の周囲に主に文書伝達に携わる宦官が増加した事実に基づき、当該期を宦官擡頭の転換点と位置づけたのであろう。

鄧氏の宦官利用に関して、富田氏は永初四年（一一〇）、鄧太后の母親新野君の死を契機に鄧氏一族が官界から意識的に身を引いたあと、「省尚書事」補完の爲の人的要因として宦官の起用を図ることになつたとする「富田 二〇〇一」。しかし、宦官を文書伝達や諮問に使用したとしても、その実態については検討すべきである。そこで、鄧太后臨朝称制期にあらわれた政權批判を中心に、宦官利用の実態を考察する。

まず、鄧太后臨朝称制期に起こつた政權批判としては、安帝の即位間もない永初元年（一〇七）に、司空周章が安帝と鄧太后の廢立を目論み、失敗に終わつた事件が挙げられる。

永初元年、魏霸に代わりて太常と爲る。其の冬、尹勤に代わりて司空と爲る。是の時中常侍鄭眾・蔡倫等皆

な執を乗り政に豫り、章數しば直言を進む。……章、眾心の附せざるを以て、遂に密かに謀りて宮門を閉じ、車騎將軍鄧騭兄弟及び鄭眾・蔡倫を誅し、尙書を劫し、太后を南宮に廢し、帝を封じて遠國の王と爲し、而して平原王勝を立てんとす。<sup>(15)</sup>

〔後漢書〕列伝二三周章列伝

周章がこの時、鄧氏もろとも宦官の鄭衆、蔡倫を排斥しようとしたことは注目すべきである。鄭衆は永元四年（九二）和帝が皇太后である竇氏一族から政權を奪還する際に重大な働きを果たした宦官であり、以降鄭衆は「常に議事に與」った〔後漢書〕列伝六八宦者鄭衆列伝。また、蔡倫も和帝期からすでに中常侍に任ぜられており、權力を握っていた〔後漢書〕列伝六八宦者蔡倫列伝。〔続漢書〕五行志。このように和帝期に重用された宦官二人は、鄧太后臨朝称制期にも引き続いて朝政に参与した。鄧太后臨朝称制期における宦官の利用は確かに存在していたのである。しかし、中常侍鄭衆が元初元年（一一四）に死去して以降の宦官の寵臣は蔡倫一人しか確認できない。

次に、鄧太后の臨朝称制を批判する以下の三例を確認する。

永初元年、孝廉に擧げられ、郎中と爲る。時に和熹鄧后臨朝し、權は外戚に在り。根、安帝年長じ、宜しく政事を親しくすべきを以て、乃ち同時の郎と上書して直諫す。<sup>(16)</sup>

〔後漢書〕列伝四七杜根列伝

初め、平原郡の吏の成翊世も亦た太后を諫めて政を歸せしめんとし、坐して罪に抵たる。（安帝親政後）根と與に俱に徴せられ、擢んでられ尙書郎と爲り、竝びに納用せらる。<sup>(17)</sup>

〔後漢書〕列伝四七杜根列伝

康太后、久しく朝政に臨み、宗門盛満なるを以て、數しば長樂宮に上書して諫爭し、宜しく公室を崇び、自ら私權を損なうべしとし、言甚だ切至。太后從わず。康、心に畏懼を懷き、永寧元年、遂に病と謝して朝せず。<sup>(18)</sup>

後漢安帝期における宮廷勢力の変容 平松

〔後漢書〕列伝六鄧康列伝

鄧太后は約十五年にわたる長期の臨朝稱制を行っていたが、これに対し、先の杜根、成翊世、鄧康はいずれも政権の返還もしくは鄧氏の自重を求めていた。しかし、宦官の利用そのものは批判しておらず、当時の官界では宦官利用そのものに対する批判はさほど強くなかったとみることができ<sup>(19)</sup>。加えて鄧康が越騎校尉に就いたのは永初六年（一一二）前後であり、政権批判もそれ以後に出されたものと考えられる。つまり鄧康の批判は、富田氏が宦官の利用を図る契機になったと考える永初四年（一一〇）の新野君死後に出されたにも拘らず、一族の自重を勧告するのみであり宦官の利用に関しては何ら触れていない。

一方、永初四年（一一〇）以降にも中央の政界に鄧氏は確認できる。まず、領袖である鄧騭は、「其れ大議有れば、乃ち朝堂に詣で、公卿と參謀<sup>(20)</sup>す」とあるように、將軍職を退いた後も、重大な議題があればその検討に携わった。加えて、鄧太后の甥である鄧珍が元初四年（一一七）に黃門侍郎に就いて<sup>(21)</sup>いる。また、鄧太后の従兄弟である鄧康は少なくとも永寧元年（一二〇）までは越騎校尉の官にあった。富田氏が指摘するように、必ずしも永初四年（一一〇）に鄧氏一族が一斉に官を退いたもしくは朝政に関わらなくなったとはいえないのである。<sup>(22)</sup>また、東氏も論じているように鄧氏は益州を中心とした「地方」人士と積極的に提携し、尚書台の官も鄧氏派官僚が掌握していた〔東一九九五・一九七・二二四頁〕。鄧太后崩御の際の尚書令と推測される殷諷はかつて鄧騭により朝廷に推薦された人物であり、安帝親政期に至るまで鄧氏が尚書を掌握していたとみなすことができる。汪桂海氏は後漢代の尚書の職掌について、上奏文の取捨選択と上奏時の意見提出を認めている〔汪桂海 一九九九・一六五・一六九頁〕。氏の意見



に従えば、鄧氏は尚書台に鄧氏派官僚を配置し、上奏時に意見を提出することで、鄧太后の政策決定を補助したのである。<sup>(23)</sup>

『後漢書』の朱穆列伝、宦者列伝および和帝期からの宦官重用の流れに鑑みるに、鄧太后臨朝称制期の宦官は主に文書伝達の方面で勢力を拡大していた。朱穆はその点を重視し、宦官重用の転換期を鄧太后臨朝称制期に求めたのだろう。ただしその程度は官界からの大々的な批判を受けるほどではなく、また鄧氏による尚書台掌握を考えると、彼らが宦官を必要とした動機は比較的弱かったと考えられる。一方、鄧太后死後の、安帝親政期と閻太后臨朝称制期には宦官の政治的擡頭が顕著である。次節ではその時代の宦官に関して検討する。

## 第二節 安帝親政期から閻太后臨朝称制期にかけての宦官の擡頭

安帝親政に至り、安帝および閻氏に重用された宦官の筆頭としては江京が挙げられる。彼は鄧氏の誅滅後に小黄門から中常侍に遷り大長秋を兼ね権勢をふるったが、順帝擁立クーデタ時に誅殺された。安帝、北郷侯の死という危機的状況において閻氏に意見し、その意見が採用されていること、また大長秋という皇后近侍の官に就いていたことから、閻氏に緊密な関係であったと考えられる。その他の安帝親政期中常侍としては李閏、樊<sup>(24)</sup>豊が挙げられる。加えて黄門令の劉安、鉤盾令の陳達もこの時期権勢をふるった。<sup>(25)</sup>そして安帝の乳母王聖、その娘の王伯榮も政治に参与し、後漢における乳母による政治参与の端緒となった。<sup>(26)</sup>このように、安帝が親政を開始するや宦官五名、乳母（乳母の娘）二名が擡頭するに至るのである。鄧太后臨朝称制期に著名であった宦官は二人、しかも両者とも

和帝期からすでに重用されていたことを考えると、安帝が和帝、鄧太后と比べ宦官、乳母を重視する傾向にあったことは明らかである。また、中常侍李閏は耿宝を通じて自身の兄を楊震に辟召させようとする（『後漢書』列伝四四楊震列伝）など、宦官による選挙請託もこの時期から確認できるようになる。

では、このような宦官擡頭の要因とは何であつたのだろうか。安帝の個人的資質、嗜好も勿論関係していたであろう。しかし、それに加えて安帝親政後の政治状況についても三点ほど考慮に入れる必要がある。

まず一点目として鄧氏派官僚の存在が挙げられる。安帝は親政にあたり鄧氏を誅滅したが、彼らは外朝や尚書台に広く根を張っていたこともあり、鄧氏誅滅に対する不満も多く出された（『後漢書』列伝六鄧騭列伝）。加えて、後述する楊震をはじめとする鄧氏派官僚も依然として一定数存在していた。<sup>(27)</sup>

二点目として安帝即位の正統性に対する疑義が渡邊将智氏により指摘されている「渡邊将智 二〇一二」。和帝の実子である平原王劉勝が、疾病を理由に鄧太后によって帝位の継承を妨害され、傍系である安帝が即位したことに對して官界から不満が出たということである。また、劉勝の二代後の平原王である劉翼は鄧太后の兄、鄧曄らが安帝に代えて帝位に即けようとしていたとされる人物であり（『後漢書』列伝六八宦者孫程列伝）、こうした対立候補が帝位に即く可能性も存在していた。

三点目として、その結果、安帝親政期の中央政界が不安定であつたことが挙げられる。当該期には複数の外戚が存在し、また楊震を筆頭に彼らに敵対する高位の鄧氏派官僚も宮中に存在していた。皇帝の親政下では耿氏、閻氏のいずれも専權をふるいうるには足りず、複数の外戚が拮抗する状況下で、外戚と皇帝の信任を受ける宦官、乳母

が結合し、皇帝の左右にあることで権力維持と政敵排除に努めることは極めて自然なことであった。<sup>(28)</sup> 閻氏が大長秋江京、中常侍樊豐を利用して皇太子を廢位したように（『後漢書』本紀一〇安思閻皇后紀）、外戚は自身の要望を実現するために、安帝の意思決定に関与する宦官を積極的に利用した。<sup>(29)</sup>

後述のように、安帝は自身に忠実な官僚を尚書台に集結させることにより、鄧氏派官僚に対抗したが、尚書台からの上奏文は安帝自らが決裁する必要があった。尚書官僚は上奏文に意見を加えることで、皇帝の意思決定を輔佐することが可能であった一方で、禁中への出入は禁じられていたため、最終的な裁可には関与できなかった。安帝は自身に近侍していた宦官の意見を裁可にあたり参考にしたと考えられる。侍中や議郎などの士人専任の官も顧問應對に携わっていたが、政權交代の不安定な時期にあたり、長年親政を行えなかった安帝が周囲に控えていた宦官らを重用したのは必然であろう。加えて、鄧氏が臨朝称制開始直後より尚書台を掌握したのに対し、安帝が尚書台に自派の官僚を配置できたのは、尚書令陳忠らの任官時期から考えて、政權奪取から約一年後の延光元年（一二二）以降である。それまでの期間安帝に近侍し、鄧氏誅滅などの政策決定に関わった宦官らを、安帝は継続して利用したと考えられる。また、外戚は政治的発言力を強めた宦官と選挙請託などを通じて提携することで、安帝に対する影響力を保持できた。こうして、安帝、外戚双方が宦官を必要としたことで、安帝親政期における宦官の擡頭要因がそろったとみなすことができる。

それではなぜ安帝は鄧氏派官僚を一掃するに至らなかったのか。また閻太后臨朝称制期において、江京や李閭、劉安、陳達といった複数の宦官が閻氏の周囲に存在し続けたのはなぜなのか。次章では、これらの疑問に関して士

人官僚と外戚、宦官の關係から検討する。

### 第三章 安帝親政期から閼太后臨朝称制期にかけての士人官僚

#### 第一節 安帝親政期の中央政界における問題——鄧氏派官僚の残留と皇太子廢嫡問題——

鄧太后の死により安帝は親政を開始したが、その親政は開始直後から問題を抱えていた。

まず、安帝は親政開始直後に鄧騭をはじめとする鄧氏を一掃した。これにより鄧騭、鄧鳳（鄧騭の子）、鄧豹（鄧騭の従兄弟）、鄧遵（鄧騭の従兄弟）、鄧暢（鄧騭の従兄弟）、鄧忠（鄧騭の甥）、鄧広宗（鄧騭の甥）が処分される、もしくは自殺し、宗族は皆免官されて本郡に帰された。これに対し、特に鄧騭の処分については官界から抗議が起こり、安帝は鄧氏の諸兄弟を洛陽に戻させたが、鄧氏が著しく凋落したことに変わりはない。

では、この際鄧氏派官僚に対してどのような処分が下ったのか。まず、鄧騭によつて朝廷に推薦された人間としては何熙、祿諷、羊浸、李邵が挙げられる。しかしこの中で鄧氏誅滅と同時期に官を去った人間は李邵のみであり、例えば祿諷は尚書令という要職に就いていたにも拘らず、その後も官界に残り、劉保（後の順帝）が皇太子の位を追われた時には来歴らと共に反対運動を起こしている<sup>31</sup>。また、鄧騭の府に辟召された人間は、楊震、朱寵、陳禪、張皓が挙げられる。將軍職にあった鄧騭が自ら部下として自身の府に呼び寄せた人材であり、彼らは鄧騭の故吏にあたるが、この中で鄧氏誅滅時に辞任もしくは免官された人間は朱寵、陳禪のみであり、狩野氏が指摘するように処罰に関する一定の規則性は確認できない<sup>32</sup>。「狩野 一九九三・三八二頁」。楊震が鄧氏の故吏であることを理由に免官

されたのは延光三年（一二四）のことであり、安帝親政期のうち三年間は重用されていた。このことは延光二年（一二三）に楊震が太尉に任ぜられたことからもうかがえる。その間楊震は宦官らの横暴について鋭く批判していたが、安帝は数年にわたり彼を処罰するに至らなかった。こうした故吏に対する処罰の不規則性は、なぜ生じたのだろうか。

渡邊義浩氏は楊氏など「家学」を持つ官僚からはそれを学ぶ門生という具体的な人的結合関係が生じ、時には皇帝権力に対する支えとなったとする<sup>(33)</sup>「渡邊義浩 一九九五・一八六―一九一頁」。処罰されなかった鄧氏の故吏すべてが「家学」を持っていたわけではないが、地方官が赴任先において現地の門生と師弟関係を築いた以上<sup>(34)</sup>、免官時に生じる影響は必然的に大きくなり、鄧氏派官僚の一掃には及ばなかったと考えられる。

加えて、皇太子廢嫡問題に関しても、後漢建国の功臣一族である来歴を筆頭に官界から強い非難が起っていた。事の経緯は以下のとおりである。宦官江京、樊豐は安帝の乳母王聖らと共に皇太子の廢位を訴え、安帝は公卿議を開催する。そこで当時太僕であった来歴は太常の桓焉<sup>(35)</sup>、廷尉の張皓と共に皇太子廢嫡の非を訴えるが、安帝はそれを聞き入れず、廢嫡を断行した。次いで来歴は十余名の官僚と共に反対運動を起したが、これも聞き入れられず、安帝の怒りを畏れた官僚たちは次々と反対運動をやめ、唯一残った来歴は免官された。一見すると安帝の意のままに、問題が解決したかのようにである。しかし、閹太后臨朝称制期においても李郃や宦官孫程らが廢太子の擁立を謀り、このうち孫程らによるクーデタが成功したことを考えると、皇太子廢位に対する悪感情は依然として宮中に存在し続けたと思われる。また、この運動に鄧氏派もしくはそれに近い人間であった、殺諷や桓焉が関与していた

ことも留意すべきである。このように安帝の親政は、鄧氏派官僚の残留、皇太子廢嫡に伴う官僚の反発という点で、不安要素を抱えていた。

## 第二節 安帝親政期における士人官僚の活用

こうした中央政界に対して安帝はどのように対応したのか。まず、安帝が親政にあたり招聘した人材としては、鄧氏を批判し免官された、反鄧氏派官僚が挙げられる。第二章第一節で言及した杜根、成翊世、鄧康はいずれも鄧太后臨朝稱制期に免ぜられたが、安帝親政期に入ると官界に呼び戻された。杜根は、鄧太后による長期政権を批判し殺されかけたが、安帝親政後に侍御史を拝した。成翊世も鄧氏批判を行い罪せられたが、安帝親政後に尚書郎となった。鄧康は鄧太后により属籍を絶たれていた（外戚も含めた宗室の親属の名籍から除くこと。「東一九九五・九九一〇〇頁」）が、安帝親政後に侍中を拝した。このように鄧太后により何らかの処分が下された官僚を安帝が招聘したことは留意すべき事実である。いまだ宮中に残る鄧氏派官僚に対する人事であった可能性は非常に高い。

次に後漢において政策決定で大きな役割を果たした尚書台の人事に関して検討する。安帝親政期から閼太后臨朝稱制期にかけての尚書台は、東氏の言う貴戚に批判的な儒家官僚の系譜を引く地域（潁川・汝南・陳留・沛など）出身の人間〔東一九九五・二二五～二二〇頁〕が目立つ傾向にある。<sup>37</sup>まず、安帝親政期に尚書の任についていた陳忠について検討する。陳忠は沛国洨の人である。長らく尚書の官にあったことから、尚書僕射に遷り、安帝親政期に尚書令を拝した。延光三年（一二四）司隸校尉に遷り、宦官、外戚を弾劾したことで地方に転出されそうになるも、

延光四年（一二五）に尚書令に戻り、その後まもなく死去している。延光三年（一二四）を除き、安帝親政期の大半を尚書官僚として過ごした人物である。<sup>(38)</sup> 官にあるときは鄧氏の故吏の朱寵、陳禪を弾劾した。また、先述した杜根、成翊世らを安帝に推薦したのも陳忠であり、政治的に反鄧氏の立場をとっていた。この他、陳忠は諸々の尚書と共に皇太子廢位に固く反対した来歴を弾劾した<sup>(39)</sup>（『後漢書』列伝三六陳忠列伝）。また、安帝親政期に中央に呼び戻された成翊世は尚書郎に任ぜられた後、皇太子廢位に反対して官を追われることになる。しかし来歴を中心とする皇太子廢位反対運動の参加者は、詳細に名が伝わっているにも拘らず（『後漢書』列伝五来歴伝）、この時成翊世が来歴らと共に行動した形跡はない。陳忠が「諸々の尚書」と共に来歴を弾劾したことをあわせ考えると、尚書台は、鄧氏派官僚を含む、来歴らの皇太子廢位反対運動と協調せず、反外戚（鄧氏）の立場にいるものも目立った。安帝親政期の尚書は反鄧氏の傾向が強かったと推測でき、<sup>(40)</sup> 安帝が自身で政治を摂るにあたり、自身に有利になる人材を尚書台に集めたと考えられる。<sup>(41)</sup> 彼らは反外戚という立場から安帝の外戚を批判することはあったが、廢太子の一件にみえるように安帝の決定には従順であった。安帝の外戚を批判することはあれ、安帝親政下で反鄧氏派官僚を尚書台に集結させることには意味があったであろう。

この他、外戚耿氏と提携した官僚のうち周広、謝暉、劉瓌<sup>(42)</sup>は侍中を拜したが、耿氏の誅滅と共に免官された。なお周広、謝暉の出身は不明であるが、劉瓌は宗室である。

閻氏と提携した官僚は劉授、馮石、劉喜が挙げられる。劉授は延光元年（一二二）司空に就き、楊震の代わりに耿宝、閻顕の選挙請託を受けた。馮石は南陽湖陽の人である。延光三年（一二四）楊震に代わり太尉となり、延光



四年（一二五）北郷侯の即位、閻太后の臨朝称制と共に太傅に遷り、録尚書事の任も与えられた。加えて馮石の子の馮世は黃門侍郎、その他の二子は侍中を拜している。劉喜は東萊の人であり、延光四年（一二五）に司徒から太尉に遷っている。馮石と同じく録尚書事も付与された。これら三者はいずれも閻氏の誅滅と共に免官されており、閻氏と提携していたことは明らかである。

以上、耿氏、閻氏と提携した六人は、出身が明らかでない者もいるが、概ね鄧氏派官僚でもなく、反外戚の傾向が強い土地出身者でもない人間が目立つ。こうした官員や一部の宗室が、耿氏、閻氏と提携したものと考えられる。では次に、閻太后臨朝称制期に、閻氏がどのような人間を招聘したか、また尚書台との関係はどのようなものであったかを考察する。

### 第三節 閻太后臨朝称制期の官界と尚書台

延光四年（一二五）三月安帝が崩御し、北郷侯の即位に伴い閻太后が臨朝称制を開始した。その際、閻頊が自身の府に辟召、もしくは閻太后が中央に呼び戻した人間は、管見の限り崔瑗、陳禪、李郃、来歴の四名が確認できる。以下、その略歴を記す。

崔瑗は度遼將軍鄧遵に辟せられてまもなく鄧氏の誅滅と共に免官され、後に車騎將軍閻頊の府に辟せられた。陳禪は先述のとおり鄧隲の故吏であり、鄧太后臨朝称制期に左遷、そして鄧氏誅滅時に免官されたが、後に車騎將軍閻頊の府に辟せられた。李郃は建光元年（一二二）に請託によって免ぜられたが、北郷侯即位後の延光四年（一二五）<sup>(43)</sup>



夏四月に司空を拜した。来歴は先述のように廢太子問題で免官された後、閼太后により將作大匠に任ぜられた。

ここで、閼太后臨朝称制期に閼氏により招聘された人材が、いずれも安帝親政期に免官された人間であることに注目したい。さらに、陳禪と来歴、東氏に従うならば李郃も含めた三人が尚書陳忠により弾劾された過去を持つ<sup>(44)</sup>。では閼氏はなぜ、安帝親政期に官界を追われた人間を呼び戻したのか。理由の一つとして、尚書台との関係が挙げられる。

陳忠は尚書令を拜してすぐ死去し、その後任は順帝擁立クーデタ時に尚書令に就いていた劉光であったと考えられる。彼もまた、沛国蕭、つまり外戚に否定的な儒家官僚の多い地域出身である。また、順帝擁立クーデタの際、劉光は尚書として詔勅の作成に関わったが、この時点でクーデタの帰趨はまだ定まっていなかったとされ「富田二〇〇〇」<sup>(45)</sup>、彼の反外戚意識の表れとすることもできる。この他、尚書郭鎮はクーデタ勃発時、病床にあったにも拘らず、事が起こるや現場に駆けつけ、衛尉閼景を切り伏せた。その功績もあり、後に尚書令に昇進した。なお、彼もまた外戚に否定的な儒家官僚の多い潁川の出身である。

以上、安帝親政期の陳忠以降の尚書令を列挙すると、外戚に否定的な立場をとる者が連続していることがわかる。尚書郎成翊世、尚書郭鎮の存在を併せて考えても、安帝親政期から閼太后臨朝称制期の尚書台には反外戚の立場の者が目立つ<sup>(46)</sup>。安帝親政期においては反外戚の官僚を尚書に集めることが、鄧氏派官僚に対抗する策として意義があったと考えられる。しかし、陳忠が安帝期の宦官、外戚に対し批判を加えたように彼らは閼氏に対しても否定的であったろう。当時の尚書官僚は、皇帝に忠実ではあっても、外戚には否定的であった。よって閼氏政權は、反外戚の

立場のものが集まる尚書台を政策立案・審議の補佐機関として活用することが難しかったのではないだろうか。第二章第一節で述べたように、後漢代の尚書は、上奏文の取捨選択と上奏時の意見提出を行っており、特に皇帝の幼少時や臨朝称制時においては大量の上奏を処理するために尚書台の必要性が増した〔汪桂海 一九九九・二六五～一六九頁〕。しかし、閻氏政権は尚書台を反外戚派官僚に占められていた状況から、尚書台を政策決定の際に十分に活用できない点で不利であったと考えられる<sup>(47)</sup>。

以上のように、政策立案・審議のための重要機関である尚書台を反外戚派に占められていたことから、閻氏は尚書の意見提出を政策決定において十分に反映できなかった。しかも、中央政界には閻氏に不満を持つ官僚が多かったことが考えられる。第二章第二節で述べたように、安帝親政期に閻氏は耿氏と共に、皇太子の廃位に与っていた〔後漢書〕列伝六八宦者孫程列伝〔統漢書〕五行志。これは官界から大いに反感を買い、閻太后臨朝称制下でも李郃らが密かに順帝擁立を謀っていた〔後漢書〕列伝七二方術李郃列伝。加えて、閻氏は名臣、太尉楊震の免官にも関与していた〔後漢書〕列伝六八宦者孫程列伝。このような情勢下で、安帝期に免官になった官僚を呼び戻すことは、尚書官僚に対する牽制、鄧氏派官僚の懐柔という二重の意味があったと考えられる。しかし結局閻氏は鄧氏派官僚とも反鄧氏派官僚とも提携できたとはいえない。閻太后臨朝称制期に呼び戻した李郃は密かに順帝擁立を計画し、陳禪も閻顕の故吏であったにも拘らず閻氏誅滅後に何ら処分を受けないまま、順帝に対し閻太后と朝見を絶つべしとの意見を奏上している<sup>(48)</sup>〔後漢書〕列伝五一周舉列伝。北郷侯危篤にあたり新帝を選出する際も、閻顕は掾吏には相談せず、ただ宦官江京らを側に置いたのみであった<sup>(49)</sup>〔後漢書〕本紀一〇安思閻皇后紀。尚書台を政策決定に十分

利用しえなかった閻氏にとって、上奏文を裁可する段階で側近を求めることは必然であり、その役割を安帝親政期より提携していた宦官に継続して担わせたと考えられる。つまり、政策決定に関する意見提出などで重要な役割を担う尚書台の活用の問題があつた閻氏政権にとって、宦官は意思決定の補佐の上で必要不可欠であつたのである。

## おわりに

以上のごとく、鄧太后臨朝称制期から閻太后臨朝称制期までの時期を概観してきた。鄧氏は益州を中心とした地方人士と広く提携し、尚書や外朝を掌握していた〔東一九九五～一九七二四頁〕。鄧太后臨朝称制期に宦官の勢力が拡大したことは間違いないが、永初四年（一一〇）の新野君の死去以降、官に就いた鄧氏もいた。特に領袖である鄧騭は、重大な議題がある際には朝議に参加しており、註（43）で挙げた任尚の例にもあつたように、鄧騭の影響力は彼が官を退いた後も継続していた。鄧太后が宦官を身近にいた相談役として扱っていた可能性は否定できないが、鄧氏の宦官に対する比重は以降の閻氏、梁氏の臨朝称制ほどは重くなかつたと考えられる。また、鄧太后臨朝称制期には宦官の選挙請託も確認できない。

宦官を側近として必要としていたのは鄧太后臨朝称制期よりもむしろ安帝親政期から閻太后臨朝称制期にかけてであつた。安帝親政期の複数の外戚および政敵の存在、政情不安定、閻太后臨朝称制期の尚書、儒家官僚との提携の困難さが外戚と宦官の提携を生んだ土台であつた。

以降順帝期、梁太后臨朝称制期において宦官と外戚の提携が活発になるが、両者の接近が安帝親政期から閻太后

臨朝称制期に始まる点は留意すべきである。外戚大將軍が外征に関与せず純然たる中朝將軍化するのが安帝親政期に始まる点〔廖伯源 一九九八・二三六頁〕においても、本稿で指摘した安帝親政期および閼太后臨朝称制期が後漢政治史において重要な転換期であることは間違いない。

# 【参考文献】

- 【日本語文献】 著者五十音順
- 上谷浩一 一九九五『清流派』の系譜——後漢時代中期の地方行政刷新とそのブレーン——『古代文化』四七一、一〇一—一三頁。
- 岡安勇 一九九四「後漢における豪族の勢力形成とその展開——とくに鉅鹿およびその他の耿氏について——」『法政史学』四六、一九〇—二二頁。
- 狩野直禎 一九九三『後漢政治史の研究』、同朋舎出版。
- 鎌田重雄 一九五三「漢代の門生・故吏」『東方学』七、二五〇—二八頁。
- 小林聡 一九九三「後漢の少数民族政策について」川勝守編『東アジアにおける生産と流通の歴史社会学的研究』、中国書店、九七—一三八頁。
- 佐藤達郎 二〇〇三「胡広『漢官解詁』の編纂——その経緯と構想——」『史林』八六—四、九五—一二頁。
- 富田健之 一九八三「漢代における「黄門」の官をめぐる——黄門侍郎と宦官小黄門を中心に——」『九州大学東洋史論集』一二、二九—四九頁。
- 富田健之 二〇〇〇「後漢前半期における皇帝支配と尚書体制」『東洋学報』八一—四、一〇—三一頁。
- 富田健之 二〇〇一「後漢後半期の政局と尚書体制——「省尚書事」をめぐる——」『九州大学東洋史論集』二九、一〇—二八頁。
- 西川利文 一九九八「胡広伝覚書——党錮事件理解の前提として——」『文学部論集（佛教大学）』八二、一〇—一七頁。
- 東晋次 一九九五『後漢時代の政治と社会』、名古屋大学出版会。
- 福井重雅 一九八八『漢代官吏登用制度の研究』、創文社。
- 渡邊将智 二〇一二「後漢安帝の親政と外戚輔政」『東洋学報』

九三一四、一三〇頁。

渡邊将智 二〇一四『後漢政治制度の研究』、早稲田大学出版部。

渡邊義浩 一九九五『後漢國家の支配と儒教』、雄山閣出版。

『中國語文獻』 著者アルファベット順（ピンイン）

勞幹 一九四八『論漢代的內朝與外朝』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』一三、一二七～一二六七頁。

李学銘 二〇一三『東漢史事述論叢稿』、萬卷樓圖書股份有限公司。

廖伯源 一九九八『歷史與制度——漢代政治制度試析』、

台灣商務印書館股份有限公司。

邢義田 二〇一一『治國安邦——法制、行政與軍事——』、中華書局。

汪桂海 一九九九『漢代官文書制度』、廣西教育出版社。

## 註

(1) 順帝擁立クーデタの経緯に関しては、狩野直禎氏が詳細な検討を行っている「狩野 一九九三・四一九～四四六頁」。

(2) 安帝の実母である左姫は既に死去しており、その一族

後漢安帝期における宮廷勢力の変容 平松

である左氏は清河王家で任官されたものの、中央には進出していない（『後漢書』列伝四十五章帝八王清河王列伝）。耿氏の優越に関しては、後漢における嫡母の優位の他、左姫の父が罪を得ており、左姫自身が官婢の身分であったこと、左姫自身がすでに死去していたなどの要因が挙げられる。

(3) この他後漢には、建国の功臣である耿純を祖に持つ冀州鉅鹿の耿氏がいるが、もともと両者は同宗であることが岡安勇氏により指摘されている（岡安 一九九四）。

(4) このほかの六家は、郭氏、陰氏、馬氏、鄧氏、竇氏、梁氏である。なお殤帝期、安帝期に臨朝称制を行った鄧太后も七家の出身であった。

(5) 耿氏を含む功臣の政治的位置、特に辺境官僚としての活躍に関しては小林聡氏が詳しく検討している（小林 一九九三）。

(6) 特に耿宝の場合は清河王家時代の皇帝嫡母の兄という立場で、皇帝親政期に大將軍位に就いた点が特徴的である。渡邊義浩氏は耿宝の大將軍位就任に関して、皇太后権を淵源とするそれまでの外戚と違い、皇帝権力を淵源としたとしている（渡邊義浩 一九九五・二九〇～二九一頁）。また、渡邊将智氏は、安帝が自身の存命中に外戚の耿宝に「輔政」を委ねたことに関し、「章帝の統治方針」を発展的に継承

したためと考える「渡邊將智 二〇一二」。いずれにしてもそれまでの大將軍と異なり、皇帝親政中に就任した点は留意すべきである。

(7) 特に安帝親政期くらいからの大將軍は外征に關与せず、中央において朝政に關わり、純然たる中朝將軍化することが指摘される「廖伯源 一九九八・二三六頁」。この時の耿宝は名実ともに官界の最上層にあったことがわかる。

(8) 耿宝の子の耿箕が侍中となつたのは順帝即位後である。安帝期に耿宝の弟の子が侍中に就いたのに対し、耿氏領袖である耿宝の子が無官であつたのはやや不自然である。耿箕も安帝期に何らかの官に就いていた可能性は高いが、史料中に見いだせないため、保留とする。

(9) 渡邊義浩氏も後漢時代の皇后が再生産性を持つこと、すなわち特定の家から繰り返し皇后がだされていることを指摘している「渡邊義浩 一九九五・二七八～二八六頁」。

(10) 閭頤も大鴻臚に遷るまでは、大鴻臚以外の九卿または五校尉のいずれかの官に就いていたと考えられる。

(11) ただし黄門侍郎に就任した閭氏の諸子は延光元年（一二二）の頃で十歳前後であると指摘され、皇帝の側近としての機能を期待することはほとんど無理であつたと考えられる「富田 一九八三」。黄門侍郎は文書伝達を担当する官

であり、顧問対応的な機能に關しては『統漢書』百官志に明記されているわけではないが、皇帝ないし皇太后の身邊に文書を伝達するといった機能上、皇帝の諮問に應えていた可能性はある。

(12) 『後漢書』列伝三三朱穆列伝「乃上疏曰『案漢故事、中常侍參選士人。建武以後、乃悉用宦者……』。帝不納。後穆因進見、口復陳曰『臣聞漢家舊典、置侍中・中常侍各一人、省尚書事、黄門侍郎一人、傳發書奏、皆用姓族。自和熹太后以女主稱制、不接公卿、乃以閹人爲常侍・小黄門、通命兩宮。自此以來、權傾人主、窮困天下。宜皆罷遣、博選耆儒宿德、與參政事』」。

(13) 『後漢書』列伝六八宦者列伝序「自明帝以後、迄乎延平、委用漸大、而其員稍增、中常侍至有十人、小黄門二十人、改以金璫右貂、兼領卿署之職。鄧后以女主臨政、而萬機殷速、朝臣國議、無由參斷帷幄、稱制下令、不出房闥之間、不得不委用刑人、寄之國命。手握王爵、口含天憲、非復掖廷永巷之職、閹牖房闥之任也」。

(14) 尚書と故事の關連に關しては邢義田氏が論究している「邢義田 二〇一一・三八〇～四一二頁」。

(15) 『後漢書』列伝二三周章列伝「永初元年、代魏霸爲太常。其冬、代尹勤爲司空。是時中常侍鄭眾・蔡倫等皆秉執

豫政、章數進直言。初、和帝崩、鄧太后以皇子勝有痼疾不可奉承宗廟、貪殤帝孩抱、養爲己子、故立之、以勝爲平原王。及殤帝崩、羣臣以勝疾非痼、意咸歸之、太后以前既不立、恐後爲怨、乃立和帝兄清河孝王子祐、是爲安帝。章以眾心不附、遂密謀閉宮門、誅車騎將軍鄧騭兄弟及鄭眾・蔡倫、劫尙書、廢太后於南宮、封帝爲遠國王、而立平原王勝。

(16) 『後漢書』列伝四七杜根列伝「永初元年、舉孝廉、爲郎中。時和熹鄧后臨朝、權在外戚。根以安帝年長、宜親政事、乃與同時郎上書直諫」。

(17) 『後漢書』列伝四七杜根列伝「初、平原郡吏成翊世亦諫太后歸政、坐抵罪、與根俱徵、擢爲尙書郎、竝見納用」。

(18) 『後漢書』列伝六鄧康列伝「康以太后、久臨朝政、宗門盛滿、數上書長樂宮諫爭、宜崇公室、自損私權、言甚切至。太后不從。康心懷畏懼、永寧元年、遂謝病不朝」。

(19) 女主稱制という状況下から宦官の利用が容認されていた可能性もあるが、同じく臨朝稱制した順帝梁皇后が「太后又た宦官に溺れ、封寵する所多し、此れを以て天下失望す」(『後漢書』本紀一〇順烈梁皇后紀「太后又溺於宦官、多所封寵、以此天下失望」)と評されているように、女主稱制であっても任用次第で宦官批判は発生する。鄧太后臨朝稱制期において、宦官任用そのものを批判する上奏文が

後漢安帝期における宮廷勢力の変容 平松

ほとんど確認できないことに鑑みても、この時期の宦官利用が加速度的に進んだとは考えられない。また、周章は權力奪取の一環として、中枢にあった鄭衆、蔡倫を排除しようとしていたが、文書伝達などを中心とした宦官任用そのものに不満があったとは史料からは読み取れない。

(20) 『後漢書』列伝六鄧騭列伝「其有大議、乃詣朝堂、與公卿參謀」。

(21) 黃門侍郎は禁中への出入は許されていたが、皇帝が長樂宮、長秋宮に滞在する時には宦官専任の小黃門が文書伝達を行っていた「渡邊將智二〇一四・二三二頁」。皇太后の居所である長樂宮に出入できなかったとなると、黃門侍郎の権限は限定される。しかし、臨朝稱制時にもその原則が守られていたか否かについては別に検討する必要がある。鄧太后が士人を引見した回数が、章帝以降の皇帝親政期の事例と比しても大差ないこと、臨朝稱制期に士人官僚である張禹を「禁内に居らしめ」ていた(『後漢書』列伝三四張禹列伝)ことをあわせ考えると、黃門侍郎の長樂宮出入は完全には否定できない。

(22) この他、鄧騭の子である鄧鳳も永初四年(一一〇)以降、侍中を拝していた可能性がある。「侍中」鄧鳳は「郎中」馬融を尙書に推薦したが、元初四年(一一五)に「廣

二七七



成頌」を作成したことで馬融は鄧氏の不興を買う。馬融は結局この時尚書に昇進しなかったが、昇進の取り消しと「廣成頌」作成との間に因果関係があったとするなら、元初四年（一一五）ごろ、鄧鳳はなお侍中職にあったと推測できる。

(23) なお、決裁にあたり宦官が鄧太后に意見した可能性は考えうるのであるが、鄧太后と鄧騭らの関係は良好であり、鄧騭はしばしば宮中に入出していた。鄧氏が宦官を利用してまで、鄧太后の意思決定に関与する必要はなかったであろう。

(24) 李閏は閭太后臨朝称制期においても權勢をふるったが、順帝擁立クーデタの際、力づくに孫程らの仲間を引き入れられ、結果的に一命を取り留めた。樊豐は安帝崩御の際、大將軍耿宝らの一派として誅されている。なお、安帝親政開始にあたり、江京、樊豐が別の官より「中常侍に遷」ったのに対し、樊豐は「中常侍」とのみ記され、前任の官は不明である（『後漢書』列伝六八宦者孫程列伝）。鄧太后臨朝称制期から中常侍に任じられていた可能性もある。しかし、中常侍が朝政に与り權勢をふるっていたとするならば、鄧氏一派の誅滅に樊豐がまきこまれないのは不自然である。鄧太后臨朝称制期における中常侍の權勢を疑問視する材料

にもなりえるが、現存の史料からは樊豐が鄧太后の時代から中常侍に就いていたかは定かではなく、あくまで可能性の提示に留めておく。

(25) 両者とも『後漢書』本紀六順帝紀では「中常侍」と記される。順帝擁立クーデタ時の詔勅にはそれぞれ「黃門令」、「鉤盾令」と記されるが、当該期には中常侍に遷っていた可能性もある。

(26) 兩名とも安帝崩御の際、大將軍耿宝の一派として誅されている。

(27) 安帝親政期に在留した鄧氏派官僚は、史書に現れる限りでは数名だが、その門生・故吏を含めると相当な数にのぼったことが推測される。

(28) 安易に同一視することはできないが、同じく複数の外戚が存在していた前漢元帝期にも外戚史氏、許氏が宦官石頭と結託して領尚書事蕭望之を失脚させた事例がある（『漢書』卷三六劉向伝）。また、元帝の外戚である史高に關して「而るに擧ぐる所私門の賓客、乳母の子弟に過ぎず」と記されている（『漢書』卷八一匡衡伝「而所擧不過私門賓客、乳母子弟」）ことから、前漢元帝期にも外戚と乳母の政治的結合が存在していたことがわかる。

(29) この他、楊震の処罰の際に、耿氏は中常侍樊豐、江京、



乳母王聖と共に讒言を行つたとされる（『続漢書』五行志）。

- (30) ただし、羊浸は鄧騭に推薦されて以降の記述が管見の限りみあたらず、鄧氏誅滅時でも処分を受けたのか否か判然としない。

- (31) なお、皇太子廢位反対運動の際の祝諷は光祿勳に就いていた。

- (32) 一方桓帝期頃には故吏への処罰が甚だしくなる。辟召に関しては福井重雅氏〔福井一九八八・四一三・四三四頁〕、故吏に関しては鎌田重雄氏〔鎌田一九五三〕に專論がある。

- (33) 渡邊義浩氏は太尉楊震碑の建立に関わつた者だけでも、司隸のすべての属部、および豫州、冀州のほとんどの属部に広がり、さらに遠く益州や涼州出身の門生も含んで、一八〇名も存在することを読み取りうると指摘する〔渡邊義浩一九九五・一三五・一三七頁〕。

- (34) 鄧騭の府に辟召され、鄧氏誅滅時に免官されなかった官僚のうち楊震は「家学」を持つことに加えて東萊太守を経験しており、張皓も彭城の相を経ている。鄧氏誅滅後に免官された陳禪は漢中太守を経験しているが、彼の場合鄧太后臨朝称制期にすでに尚書陳忠の弾劾を受けて左遷されている。このことは考慮すべきであろう。

後漢安帝期における宮廷勢力の変容 平松

- (35) 太子少傅の任に就いていた。桓焉の父親の桓郁は楊震、朱寵の師であつたことから、鄧氏派官僚とも近い立場にあつたことが推測される。

- (36) 祝諷（光祿勳）、劉璋（宗正）、薛皓（将作大匠）、閭丘弘、陳光、趙代、施延（侍中）、朱伉、第五頴（太中大夫）、曹成（中散大夫）、李尤（諫議大夫）、張敬（符節令）、龔調（持書侍御史）、孔顯（羽林右監）、徐崇（城門司馬）、樂闐（衛尉守丞）、鄭安世（長樂・未央廄令）が挙げられる。（一）内は官職を表す。

- (37) 上谷氏はこうした反鄧氏派官僚を、鄧氏の持つ「二面性」により「刷新派」から分裂した一派であると位置づけている〔上谷一九九五〕。

- (38) 陳忠が尚書僕射、尚書令に遷つた正確な時期は、史料の關係上明らかにしがたい。

- (39) なお、来歴は楊震の失脚、自殺にも同情的であつた〔『後漢書』列伝五来歴列伝〕。

- (40) 安帝親政期において確実に尚書官僚であつたと特定できるのは、管見の限り尚書（尚書僕射・尚書令）陳忠、尚書侍郎冷宏（『後漢紀』永寧二年条には「岑宏」とある）、尚書翟酺、尚書郭鎮、尚書郎（尚書僕射）胡広、尚書郎張衡、尚書郎成翊世、尚書郎周興の八名である。

このうち陳忠が反外戚であることは明らかであり、成翊世、周興は陳忠が推薦した人物である。また、翟輔は安帝の外戚である耿氏、閭氏に批判的であった（『後漢書』列伝三八翟輔伝）。なお、尚書郭鎮は後述する順帝擁立クーデタにおける働きからも反閭氏であったことは明らかである。ただし、その他の記述に乏しく、反鄧氏であったか否かまでは明らかでない。また、張衡は大将軍鄧騭の辟召を複数回断っており（『後漢書』列伝四九張衡伝）、反鄧氏の傾向をうかがうことができる。加えて、延光二年（一二三）暦の問題が起こるに際して、陳忠が張衡、周興に賛同していることから、少なくとも反鄧氏派である陳忠と敵対はしていなかったものと考ええる（『統漢書』律曆志）。また、張衡は順帝期に孫程ら宦官、更には梁商、梁冀ら外戚への過度の寵遇を諫めて上疏をするが、彼はこうした政治秩序の乱れと陵遅への危機感から『周官解詁』を構想、執筆したことが指摘される（『佐藤二〇〇三』）。反外戚、反宦官の立場にあったことは明らかであろう。冷宏に関しては史書に一箇所しか現れないため、彼の思想、立場は不明である。胡広に関しては、この後、桓帝期には梁冀と近しかった傾向もあるが、質帝崩御後の新帝冊立に際し、胡広は清流派官僚である李固に当初同調していた（『後漢書』列伝五三

李固列伝）。胡広が外戚に接近するのはむしろ桓帝冊立以降ではないかと推測できる。なお、西川利文氏は胡広と梁冀との関係について、当時の中央官僚のほとんどが梁冀と何らかの関係を持っており、梁冀誅滅時の胡広の免官は梁冀への阿附が原因ではなく、また胡広が、三公就任以前には政治的信念を持って活動していたことを指摘する（『西川一九九八』）。

この他、安帝親政開始直後の尚書令殺諷を挙げることができるが、彼は少なくとも延光三年（一二四）には光祿勳として記述される。安帝親政期に尚書としての活動がみられなため、八人の中には数えなかった。尚書孟布も同様の理由で安帝親政期の尚書に数えていない。

（41）渡邊将智氏は尚書台について、政策案を専門的に作成・審議する機関ではなく、むしろ文書伝達の中核機関というべき官署であったと解釈する（『渡邊将智二〇一四』一八三―一八五、二三四―二三八頁）。しかし、順帝が尚書に意見を求める事例（『後漢書』列伝四八虞詡伝）など、後漢には尚書台が政策決定に寄与する例は多くみられることから、筆者はやはり意思決定に寄与していたものとして考える。

（42）『後漢書』本紀一〇安思閭皇后紀には安帝乳母、王聖

の娘は王永、王永の夫の名前は樊巖であり黃門侍郎に就いていたとされる。

(43) 建光元年(一二二)が鄧氏誅滅の年であることを考えると、鄧氏との関係性ゆえに免ぜられた可能性が高い。李郃は鄧騭の府に辟せられた官僚ではないが、鄧騭により朝廷に推薦されており、任尚の処分に関して鄧騭の意を受けた行動をとっている(『後漢書』列伝二九劉惔列伝)。ここから考えても、李郃が鄧騭に近い立場にあったことは明らかである。

(44) 陳禪は永寧元年(一二〇)安帝が西南夷の音楽と曲芸を楽しむことを批判したが、これにより尚書陳忠の彈劾を受け、左遷された(『後漢書』列伝四一陳禪列伝)。李郃は前註で挙げた、任尚の処分に関する動向で尚書の讒咎を受けたが、この時陳忠は尚書であった。陳忠の政治的立場に鑑みるに、この時の讒責に彼が関わっていた可能性は高い。来歴が陳忠による彈劾を受けたことは、先述したとおりである。

(45) クーデタという非常事態にあつて劉光が武器を持った宦官らに脅されやむなく順帝に協力した可能性も否定できない。しかし、順帝即位後、劉光は太常という九卿の一つに就き、永建二年(一二七)には太常から太尉、録尚書事

後漢安帝期における宮廷勢力の変容 平松

に遷ったことを考えると、少なくとも劉光が閻氏に協力的であつたとは考えられない。孫程らに脅され、クーデタに協力した李閎が順帝即位後優遇されなかったこととは対照的である。

(46) 安帝親政期の尚書のうち翟酺は延光三年(一二四)に太守として転出している。その他、先述したように成翊世は延光三年(一二四)ごろ官を去っており、陳忠は安帝崩御(一二五)前後に死去している。一方、胡広は順帝期に済陰太守に転出するまでの十数年間は尚書系の官を歴任しており「西川一九九八」、閻太后臨朝称制期も尚書の任にあつたと考えられる。その他、閻太后臨朝称制期も尚書であつたことが史書から明確にわかるのは郭鎮のみである。しかし、劉光の例で見たように反外戚の傾向は継続していたと考えられる。

また尚書賈朗は順帝即位の翌年に官にあつたことが確認でき、彼は、当時権勢をふるっていた中常侍張防と親しかったとある(『後漢書』列伝四八虞詡伝)。時期を考えると、賈朗が閻太后臨朝称制期に尚書であつた可能性も否定できないが、中常侍張防が順帝即位直後に権勢をふるっていた以上、閻氏との関わりがあつたとは考えにくい。彼と親交の深かつた賈朗も同様である。

(47) ただし、閻氏と提携していた馮石、劉喜は録尚書事の

任に就いていた。しかし、李学銘氏は太傳・三公を本官とした録尚書事に関して、位は高いが実権は尚書よりもはるかに低かったとする「李学銘二〇一三・一八七―一八八頁」。汪桂海氏も録尚書事の権力の強さに関しては否定的である「汪桂海一九九九・一七六頁」。また、渡邊将智氏は録尚書事を官名ではないとしたうえで、「尚書の事を録ぶ」とは「官僚機構の統率と国政の総覧を許可されたことを示す慣用的な表現」であるが、象徴的な意味合いであり、それだけでは制度的な基盤とはなりえなかったとする「渡邊将智二〇一四・九六―一〇八頁」。筆者も現段階では上記の三者に従い、録尚書事だけでは国政運営において十分

な権力を發揮しえなかったと考える。

(48) 閻頊の故吏である陳禪が、閻氏に不利になることを奏上したことに對する批判は管見の限りみあたらない。そもそも陳禪は閻氏の保全に積極的ではなく（『後漢書』列伝四二崔瑗列伝）、閻氏政權下において閻頊は陳禪とあまり良好な關係を築いていなかったようにみえる。

(49) 崔瑗は閻頊に對し、北郷侯の廢位と順帝の即位を訴えようとしていた。しかし、閻頊は日々酒に溺れ、崔瑗は接見さえかなわなかった（『後漢書』列伝四二崔瑗列伝）。江京らを身近に置いていたことは対照的である。

（京都大学文学部非常勤講師）

# THE TOYO GAKUHO

Vol.98, No.3 - DECEMBER 2016

(THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT  
OF THE TOYO BUNKO)

The Changing Face of Imperial Court Politics during the Reign of Later Han  
Emperor An: On the Rise of the Eunuchs

HIRAMATSU Asuka

In the research to date on the Later Han Dynasty, the Dowager Empress Deng's (鄧太后) regency has been characterized as an era in which eunuchs rose to power at Court. However, alliances between eunuchs and imperial in-laws in such practices as influence peddling for court appointments (選舉請託) became ingrained during the era of Emperor An's (安帝) direct rule and the regency of Dowager Empress Yan (閹太后). As this period has not been duly noted due to its short duration, the author of this article examines it by focusing on imperial in-laws, eunuchs and literati bureaucrats, in an attempt to explain the reasons for the rise of the eunuchs at that time.

The author begins with an investigation of two imperial in-law clans, the Gengs (耿) and the Yans (閹), discussing their family pedigrees, court appointments and influence they exercised at Court. The article then moves to the main question of the rise of the eunuchs and its various causes. To begin with, criticism of the governance during the regency of Dowager Empress Deng and the infiltration of the Deng Clan into the bureaucracy are discussed as factors. The author concludes the eunuchs in this period first gained influence at Court through the drafting and transfer of documents, before forming their affiliations with court in-laws. Then, regarding the political participation of eunuchs under the direct imperial rule of Emperor An, the author raises examples in order to show the motivation behind the Emperor and his in-laws coming to regard the eunuchs as indispensable.

This is followed by an examination of the literati bureaucrats in office during the reign of Emperor An and the regency of Dowager Empress Yan.

First, the author confirms the fact that a certain number of Deng Clan bureaucrats managed to retain their appointments during the reign of Emperor An, then shows that the Emperor resisted this move by summoning bureaucrats opposed to the Deng Clan to his side, as evidenced by the large anti-Deng character of the Office of Palace Writers (Shangshu 尚書). Finally, the author shows that this trend continued even during Dowager Empress Yan's regency, when reaction arose to the deposing of the Heir Apparent, and the Yan Clan was unsuccessful in building friendly relations with bureaucrats, bringing about even heavier dependence upon the eunuchs.

The author concludes that accelerated participation by the eunuchs in politics during the reign of Emperor An and the regency of Dowager Empress Yan marked an important era of transition in the history of the Later Han Dynasty.

The Formation of Lineages in mid-Ming Period Zhangzhou, Fujian:  
The Case of the Ding Lineage of Baishi Village, Longxi County

KAMEOKA Atsuko

This article focuses on the specific case of the Ding Lineage of Baishi 白石 Village, Longxi 龍溪 County, Zhangzhou 漳州 Prefecture, Fujian 福建 Province, in an attempt to understand the meaning of clan histories contained in lineage genealogies during the mid-Ming Period.

The author begins her investigation with a discussion of the ancestral shrine built by the Dings at Wenfengmuzhong 文峰畝中 during the 7th year of the mid-Ming Period's Zhengde Era (1512), which played an important function in maintaining lineage solidarity, symbolized by the memorialized merger between the Xiangxian Sublineage (Xiangxianfang 鄉賢房) of the descendants of Ding Zhiji 丁知幾, who during the Southern Song Period was awarded in his old age with the honorary title of *tezouming jinshi* 特奏名進士, and the Gongyuan Sublineage (Gongyuanfang 貢元房) of the descendants of Zhiji's older brother Ding Zhiwei 丁知微, who placed first in his local civil service examination (*gongyuan* 貢元).

Next, the author turns to the meaning of the above merger between the